

機関番号：3 2 6 3 4

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530478

研究課題名(和文) 辺野古沖海上基地建設反対運動の特質と参加者の生活史に関する実証的研究

研究課題名(英文) Positive Research on Character and Life Histories of Participants of a Movement against a Construction of Military Base on the Offing of Henoko

研究代表者

鐘ヶ江 晴彦 (KANEGAE HARUHIKO)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20129919

研究成果の概要(和文)：辺野古沖海上基地建設反対運動の特質としては、a. 運動目的の複合性、b. 参加者の多様性、c. 闘争手段の幅広さ、d. 地元第一主義、加害者意識、未来志向性、楽観主義といったリーダー達の意識、などが明らかになった。中心的な参加者のライフヒストリーとしては、沖縄出身であるか否か、学生運動や労働運動の経験、沖縄の平和運動に関与し始めた時期、辺野古の運動への参加動機などで多様性があるが、いずれも大きな「人生の転機」を経験していることが分った。

研究成果の概要(英文)：The following are the characteristics of a movement against a construction of military base on the offing of Henoko; a. complex motivations, b. diverse backgrounds of participants, c. variable means of conflict, d. high priority on the local interest, awareness as the offender, future orientation, sense of optimism.

Whether they are Okinawa citizen or not, they have experienced the student movement or labor movement, beginning time to participate in the peace movement in Okinawa, motives in exercise participation Henoko are different, they have commonly experienced a "turning point" in their personal history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会問題・社会運動

1. 研究開始当初の背景

(1) 1997年に起り、2004年春からは海底ボーリング調査を阻止するために大規模かつ継続的な座り込みや海上行動が行われた沖縄・名護市辺野古の海上基地建設(「普天

間基地移設」・沖合案)反対運動は、2005年秋には当初案を撤回に追い込むという成果を上げた。

(2) 2004年春からこの運動の参与観察調査と

一部参加者のライフヒストリー・インタビューを実施していた研究代表者が、この運動の特質と参加者のライフヒストリーにおける運動参加の意味を、社会運動論と生活史研究から明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 運動の経過の詳細と、運動参加者の広がり特性を明らかにすることを通して、この運動の特質を解明する。

(2) 参加者のライフヒストリーにおける、この運動への参加というできごとの位置を明らかにする。

(3) この運動を社会運動論、特に「新しい社会運動」論との係わりでどのように位置づけることができるのかや、メンバーの運動参加プロセスに照らしての「資源動員論」の妥当性などを検討し、この運動の社会運動論的把握と、社会運動論の再検討を同時におこなう。

3. 研究の方法

(1) 第一の研究目的を達成するために、①辺野古沖海上基地建設反対運動に関する文献・文書資料、電子資料の収集・整理、②辺野古現地に1回1週間以上、年6~7回滞在中に運動の参与観察調査を行う、③参加者名簿を「へり基地反対協」から借り出し、学生アルバイトを使って集計する、④「へり基地反対協」の事務局員Sさんが週2回発行しているミニ・ニュース『NO BASE』のバックナンバー(2006年3月末分まで)をコピーする。

(2) 第二の目的を達成するために、運動の参与観察の合間を捉えて、運動参加者からのライフヒストリー・インタビューを実施する。

(3) 研究代表者と研究協力者(専修大学文学部非常勤講師・服部あさこ)とで研究会を開催する。研究会においては、社会運動論の研究、辺野古の海上基地建設の経過の確認、現地調査の企画、収集した文献・資料の整理・分析結果の検討、トランスクリプションの読み合わせ等をおこなった上で、研究のまとめをおこない、報告書の構成案を作成する。

4. 研究成果

(1) 辺野古沖海上基地建設反対運動の特質

①運動目的の複合性

新たな軍事基地建設の阻止・すべての基地の沖縄からの撤去、平安な住民生活の保持と、それとはかなり肌合いの異なる自然環境の保全(サンゴ礁が広がりジュゴンが棲む海を

守る)がこの運動の二大目的であるが、人によっては日本の沖縄差別の撤廃、アメリカと日本による事実上の植民地支配からの独立なども強く意識されており、運動目的が複合的である。

②参加者の多様性

参加者が実に多様である。地元のおじい・おばあ、ウチナンチュー、ヤマトンチュー、本土からの帰還者、沖縄への移住者、新・旧左翼、リベラリスト、ナショナリスト、牧師、僧侶、巫女、平和主義者、環境主義者、フェミニスト、議員、労組役員、主婦、学生、定年退職者など、実に多様な人々が参加している。参加者は沖縄在住者にとどまらず全国に広がっており、数日間から数ヶ月も間地元滞在中に滞在して参加する人、しかもそれを繰り返す人も少なくない。

③闘争手段の幅広さ

闘争の方法も、非暴力直接行動を基本とするが、関連する様々な団体・運動の組織的・個人的立ち上げ、大規模な集会の開催や選挙活動、裁判闘争、代表者による当局との交渉など、役に立つことなら何でもやるという姿勢であり、極めて幅が広い。たとえば、2004年4月から1年半の機関に限っても、関連する団体・運動の立ち上げでは、すでに述べたものの他、Yさんによる那覇防衛施設局前でのハンスト(2004年11月末から20日間)とその後の支援者を交えた座り込み、県庁前座り込み(同年12月半ばから)、辺野古の阻止闘争に参加した若者達が地元へ帰って組織した「大阪行動」「名古屋行動」「京都行動」「NO BASE HENOKO Tokyo」「福岡行動」、若者が始めた「名護街宣」(2005年4月から毎土曜)などがある。裁判闘争では、ジュゴン裁判の他にも、辺野古沖ボーリング調査差し止め訴訟(2004年12月提訴)、同第二次訴訟(2005年2月、漁民約20人を原告と

して提訴)などがある。また、情宣活動も、ビラやパンフレットの他、何人もの参加者がホームページを開設しており、テント村常連の元テレビマンは、10本以上のドキュメンタリーを作り、辺野古の闘いを全国に知ってもらうために、2004・5年はビデオテープ、それ以降はDVDを1本500～1,000円で頒布している。

④おじい・おばあちの思いを何よりも重んじる地元第一主義、米軍のイラクなどでの人殺しに加担してきたという加害者意、子どもたちに平和で自然豊かな沖縄を残そうという未来志向、必ず勝てるという楽観主義による粘り強さ、など。

(2) 主要参加者のライフストーリーの分析

主要参加者10人のライフストーリーのタイプは、以下のように分れることが明らかになった。

- ・ 出自：沖縄生まれ育ち4、本土生まれ育ち・沖縄帰還2、本土生まれ育ち4
- ・ 青年期における学生運動や労働運動の経験：あり4、なし6
- ・ 沖縄の社会運動に関与するようになった時期：復帰前3、復帰後～1995年4、1996年以降3
- ・ 新基地建設反対運動への参加理由における「沖縄」へのこだわり：強い6、あまり強くない4（全員本土生まれ育ち）

しかし、自分のライフストーリーを肯定的に捉え、現在のあり方に自信を持っている点と、新基地建設反対運動での活躍に繋がる、平和、環境、沖縄の自立などを主テーマとする社会運動への参加の背景と考えられる「人生の転機」の明確な存在という点については、10人全員に共通している。なお、各人の「人生の転機」としては、以下のようなものを挙げることができる。

沖縄帰還、いじめ体験、兄弟の突然の死、受験失敗、ベトナム反戦運動への参加、全共闘運動への参加、労働運動への参加、三里塚の農民との生活、琉球人との結婚、乳幼児を手放した体験、不倫騒ぎと離婚、アメリカ南部の公民権運動との出会い、公的儀式の場での立場表明、沖縄への移住、ベトナム人民に告発された体験、運動参加による失業、市民運動家との出会い、沖縄の女性グループとの出会い

以上のように、10人のライフストーリーは、それぞれ個別的なものでありながら、自分の人生を肯定的に捉えている点と、「人生の転機」の明確な存在という点については共通性を持っている。

(3) 女性たちの、運動参加への過程と動機

分析の結果、対象者の共通点として以下のことがわかった。

- ①終戦後、自衛隊編成や日米安保などの日本の再軍備傾向、ベトナム戦争などの戦争状態をメディアを通じて知り、世界の平和が脅かされることに漠然とした不安感を抱いていた。
- ②平和への祈念を、具体的にどのような行動に移してよいかわからなかった。
- ③沖縄で、女性たちが行っている、女性としての生活経験に根ざした平和運動に出会い、デモや座り込み行動をとらした。
- ④それまではぐくんできた平和を祈念する思いから、自身の発案で座り込み行動などを行った。

沖縄の女性たちによる平和運動は、日常生活を送るうえでの不安や子どもの安全問題といった、女性に期待される役割に関連した問題を、基地反対の理由付けとする、伝統的な市民運動が主流となっている。対象者たちは、沖縄の女性による平和運動と出合ったことで、それまでの女性としての生活経験が平

和運動の動機と合致することを認識したといえる。彼女達は、自身により近い位置に問題意識をおいて具体的な行動に参加することで、行動を学習し、主体的に阻止行動を展開するに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①鐘ヶ江晴彦、服部あさこ、高橋紗希、辺野古・新海上基地建設反対運動の特質と参加者のライフヒストリー、報告書、2011、160頁
- ②服部あさこ、語りにおける脱スティグマ化の戦略、解放社会学研究、査読有、No.21、2010、pp. 101-119
- ③鐘ヶ江晴彦、「普天間基地移設」問題の経緯と本質、明日を拓く、査読無、82・83号、2009、pp. 170-187

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鐘ヶ江 晴彦 (KANEGAE HARUHIKO)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20129919

研究協力者

服部 あさこ (HATTORI ASAKO)

専修大学・文学部・非常勤講師